安房歴史文化研究会公開講座 2016 年度第 6 回（通算 46 回）

2017 年 3 月 25 日(土) 館山市コミュニティセンター

青木繁「海の幸」誕生と日露戦争の時代　②

講師　愛沢 伸雄　（NPO 法人安房文化遺産フォーラム代表）

【石橋財団ブリジストン美術館蔵】

日本を代表する洋画『海の幸』は、1904（明治 37）年夏、40 余日小谷家に滞在した青木繁によって描かれた。この夭折の画家は河北倫明氏をはじめ数多くの研究者によって世に出され、『海の幸』は日本美術史に位置付けられ国重要文化財となった。

ところで 2005 年から館山市富崎地区では漁村のまちづくりに取り組みながら小谷家住宅を市有形文化財とし、地元はもちろん全国からの支援で小谷家住宅修復事業をすすめ、昨年青木繁「海の幸」記念館として開館した。その経緯のなかで、小谷家からは明治期の水産業など人びとの動きを知ることができる貴重な資料が発見された。

これまで青木繁『海の幸』誕生について、明治期の館山・富崎の地を踏まえた地域史からの視点、とくに日露戦争の時代のなかで小谷家に関わる人びとや漁村の文化的な交流の視点からの考察は限られている。また、青木らの布良訪問や『海の幸』誕生の背景についても、美術史的な視点や青木繁の関係者のみの証言で語られてきた。

本報告では、発見された資料から青木繁が訪れた布良の地や小谷家に関わる人びとの姿、とくに「海軍望楼」という軍事施設や「帝国水難救済会布良救難所」が設置され、ときに軍事演習の地であった景勝地・布良の姿、また布良沖のウラジオストク艦隊の動きによる危機的状況など、日露戦争の戦時下、富崎の人びととの交流にもふれ、なぜ 40 余日も小谷家に逗留し、しかも絵画制作ができたのかを含め地域史の視点から私なりの考察をしたい。

＜ 目 次 ＞

１．これまで書籍に記載される「通説や証言」をみる　２ページ
（１）青木らの布良訪問の背景をさぐる
（２）「海の幸」誕生の背景をみる
２．小谷家資料や国会図書館にある明治期の「布良」を紹介した資料　７ページ
（１）青木繁が訪れた景勝地・布良
（２）布良の医者
３．青木繁らが逗留した小谷家をさぐる　12 ページ
（１）小谷喜録とその家族
（２）石井家の人びと
４．日露戦争のなかの「布良海軍望楼」と「帝国水難救済会布良救難所」　19 ページ
（１）東京湾要塞の最前線「布良」
（２）日露戦争勃発と要衝の地「布良」での動き
（３）「帝国水難救済会布良救済所」と日露戦争
５．日露戦争時下の富崎の民衆と青木らの姿　28 ページ
（１）富崎・漁村の姿をみる
（２）漁村のまちとくらしをみる
（３）地域と青木繁から日露戦争を考える

２．小谷家資料や国会図書館にある明治期の布良を紹介した資料

（１） 青木繁が訪れた景勝地・布良～明治大正期の主な地図案内記・写真集での「布良」

①『安房國安房郡布良村々誌』安房郡布良村　明治 16 年

「里俗ノ古傳説ニ曰ク…天冨命…布良浦ニ御渡海アツテ布良近傍ニ鎮定シ…土地大ニ開けケタリ命曰くク阿那此地ハ**芽出浦ナリト布良ハ芽出浦ノ短辞ナリ**故ニ地名ヲ名ノテ布良ト云ト云々又茲地ニ女神山ト云フアリ故ニ村名ヲ**女良**ト云神代系圖ニモ**女良**ト見ヘタリ云々」

●「梅野宛書簡」a. の調査検討

青木が書簡で「**女良**」と書いたのはこの伝承を調べたか、小谷喜録から聞いた可能性がある。「万葉」とは、古代を表す言葉として表現上、使用したのではないか。

②『房州避暑案内』旅人宿木村屋山嵜房吉　明治 25 年

●「布良迄へ九十二三町布良崎神社眺望殊ニ佳絶ナリ同所ニ新設セラレタル**海軍望楼**」とあるので、「海軍望楼」の設置について別項で検証する。

③『安房の冬』木下藤次郎　明治 27 年（「千葉市立美術館『木下藤次郎展』図録 2014 年」

是より或は海辺に 或は本道に道を撰はずゆきぬ　途上
数人の海女の 裸体にて濡髪を手にして走れるを見
たり　彼等は皆其丈なす髪を振り乱して 色は銅の如く
なりき
途上見るべきの佳景殆から ず　ゆき〳〵て午後の四時頃 右の
方山上に信号旗の建てるを見る　兼ねてきく布良
の入口なり

布良

房州の布良と云ふは少しはよき町かと思ひしが いつも乍ら
想像に反して淋しき漁村なり　ゆけども〳〵宿屋らしき
家なければ大に危みしが 漸く町の端れに至りて柏屋とか
云ふ一軒の家あり　さまで不潔にもあらねば 爰へ投ず
田舎の宿屋の事とて 僅少の茶代にも待遇は遇ふな
り　宿賃の廉なるに比して 食ものも注意せるか
佳なり　有繋海辺とて 平も皿もおつけの中にも魚類あ
り　われ知き魚撮ひ あまり嗜有くもなかりき
用とてなければ早く臥床に入る　暫く且小ぎたなき布
團には少々閉口せり　一驚せしはランプの明るき事にて
四畳半の小部屋に大々的丸心つり合わるし

館山さして（一月二十日）

朋に起出て爰を立つ　往く事数町 道の右に安房神
社あり　有名の社なりと聞きしが 空曇れるをもて往
手を省き 遂に参詣せず
海を離れ山に入り 電柱に沿ふて進む　白濱道の様に
多くもあらねと 魚積みし荷車の時々路より進りて来
るあり

●調査ポイント

a.　根本より布良方面に向かう記述のなかに「山上に信号旗の建てるを見る　兼ねてきく布良の入口なり」

b.　「柏屋とか云ふ一軒の家あり…田舎の宿屋」と、「柏屋」の存在

c.　大下藤次郎という人物と布良。太平洋画会の創立者の一人で、明治期の水彩画運動の中心的メンバーで、青木らと何らかの関係があったかと思われる。

◎【大下藤次郎】1870（明治３）～1911（明治 44）年　42 歳没

大下藤次郎は近代日本における水彩画のパイオニアといわれ、水彩画家をめざした第一歩が房総への写生旅行という。その紀行が『海と山 西総地方の紀行』1893（明治 26）年や『安房の冬』1894（明治 27）年であり、布良の地も訪れ水彩画を描いている。

大下藤次郎は三宅克巳や丸山晩霞らとともに明治期の水彩画運動を牽引して、水彩画の普及活動のために『水彩畫の栞』（1901（明治 34 年）や雑誌『みづゑ』1905（明治 38）年創刊などの出版に関わり、日露戦争前後から青少年に水彩画の大きなブームを呼び起こしていった。

【 a. の調査】

1894（明治 27）年 1 月 16 日から 21 日までの安房への写生旅行記で、その中に「山上の信号旗」との様子が記載され、「兼ねてきくところ」としているので、当時、根本や布良を訪れる画家文人たちの目印になっていたのか。なお、紀行文が書かれた「明治 27 年 1 月はまだ「布良海岸望楼」が開設されていないが、「仮設見張所の中に信号旗」があったと思われる）

1894（明治 27）年 1 月は日清戦争前夜であり、当時清国海軍は最新鋭艦船を含め 20 余隻の「北洋艦隊」があった。海軍は、その攻撃力をもって東京湾に侵入されることを警戒していた。その背景のもとで 1894（明治 27）年 8 月 5 日に布良に「海岸望楼」が設置された。**（別項で報告）**

【 b. の調査】

次項の資料で裏付けられた。

③『千葉県安房国全図』石井錬治　明治 35 年 10 月　（「館山市博」蔵）

旅人宿下宿屋及宿泊料概れ左の如し

北條町　濱通り　本村屋　原の宿
同上　鮫浦亭　新宿　青
八幡の釜下宿　江戸屋　八幡
此外八幡に下宿屋数軒あり
館野町　山本屋　本屋
館山町　松岡楼　藤屋　鶴屋
那古町　山田屋　下宿　杉田屋
船形町　下宿　風楼　多々良
岩井村　橋場屋　高崎下宿　湯本
勝山町　稲松楼　沼平
保田町　松音楼　青田屋
富崎村布良　稲一屋
長尾村　根本養蚕館　鹿目丸
白浜村　白浜七島屋　仝上

布良岬　富崎村布良の南端なる岬角にして伊豆の大島と相對峙す西に豆相の諸峯を眺め洲の崎平沙浦を控へ前に有名なる鬼ヶ浦鬼ヶ瀬あり最も眺望に富む此地も亦有名の水産場にして常に船舶の往來絶ゆることなく鮑鮪の漁猟壯なり三十二年海嘯の爲め港内浸害せられたるも目下官に於て數万金支出し石造の堤塘工事中なるを以て近く成工に至らば本港の美観を呈すべし近年海防の爲め海軍望楼の設けあり又大日本帝國水難救済會に於ても水難救護所の設けあり又鄉社布良崎神社あり健脚を試む所たりとす

●調査ポイント

a. 民間の地図には「海軍望楼」の場所が、裏面「房州旅行案内」には「布良岬」として、次のような記載がある。

「富崎村布良の南端なる岬角にして伊豆の大島と相對峙す西に豆相の諸峯を眺め洲の崎平砂浦を控え前に有名な鬼ヶ浦鬼ヶ瀬あり最も眺望に富む此地も亦有名の水産場にして常に船舶の往来絶ゆることなく鮑鮪の漁猟壮なり三十二年海嘯の為港内浸害せられたるも目下官に於て數万金支出し石造の堤塘工事中なるを以て近く成工に至らば本港の美観を呈すべし近年海防の為海軍望楼の設けあり又日本帝国水難救済會に於ても水難救護所の設けあり又郷社布良崎神社あり健脚を試む所たりとす」

1902（明治 35）年 10 月に発行された『千葉県安房国全図』の裏面「房州旅行案内」の「布良岬」の記載で注目されるところは

(1)「明治三十二年の海嘯」、つまり津波で布良港が被害を受け、現在、港を修復工事中で近く完成すること

(2) 近年「海軍望楼」設置

(3)「帝国水難救済会の救難所」が設置。これらのことは、青木らが布良訪問する際に「房州旅行案内」のような内容で聞いたかもしれない。

(1)の「明治三十二年」の地震津波は、1899（明治 32）年 3 月 7 日にあった「紀伊大和地震」（マグニチュード 7.0）であり、フィリピン海プレート内の深さ 40～50km であった地震とされる。紀伊半島の尾鷲などで死者 7 名があり、三重県を中心に近畿地方南部で被害があった。

この地震の津波が布良海岸まで押し寄せ「布良港突堤」に被害があったとわかったが、『千葉県の自然誌～本編千葉県の大地』「千葉県に被害を及ぼした歴史一覧」には、布良へ津波があって港突堤へ被害があったという記載はない。

なお、この突堤修築事業が県により、すぐに実施された背景で推測されるのは、「布良海岸望楼」と横須賀水雷隊の寄港に関わっていると思われるのである。この件は、別項で取り上げる。

神田家文書（「館山市博」蔵）に布良港突堤修復に関わる資料があったので紹介する。

写真は「柏屋」前に作られた「祝 布良港竣工」のアーチ（写真の人物や撮影年月日不詳）

④『房州見物』磯谷武一郎　大正６年

「布良港」「布良港は西方太平洋に開き荒磯にして繫舟すべからざれば。布良村民は六千餘百圓を投じて防波堤を築きしも明治三十二年十月海嘯の為渫はれて人家為めに其害を被れり。明治三十四年本縣縣會の決議に依り翌三十五年突堤長さ百二十四間經費二萬三百餘圓を支出し築きしものなり。」

「又望楼の設けありて其信號旗は出船入船毎に高く掲げられる」

「望楼の下、崖頭百尺の道路より崖下百尺の沙上を見れば。幾多の黒團々が此の夏なるに紅火を圍繞しつゝあるを見る。即ち是ぞ音に名高き房州の蜑女なりしよ。行き行きて巖角をめくれば茲外海の怒涛は人の心臓を鼓動せしむ。遥かに海上を隔てゝ伊豆七島を望み、西北に富嶽の雲に聳ゆるを見る真に天下無比の一奇觀なり」

⑤『敷島美観』小泉墨城編　帝国地史編纂所　明治 38 年

- 日本を代表する景観として世界に発信（英文）する場所（千葉県 4 か所）として選ばれたのが布良であった。「布良の怒涛」というテーマで紹介されている。

⑦『房州みやげ』　鷲見武一郎　東京堂　明治 45 年

「民業と生活

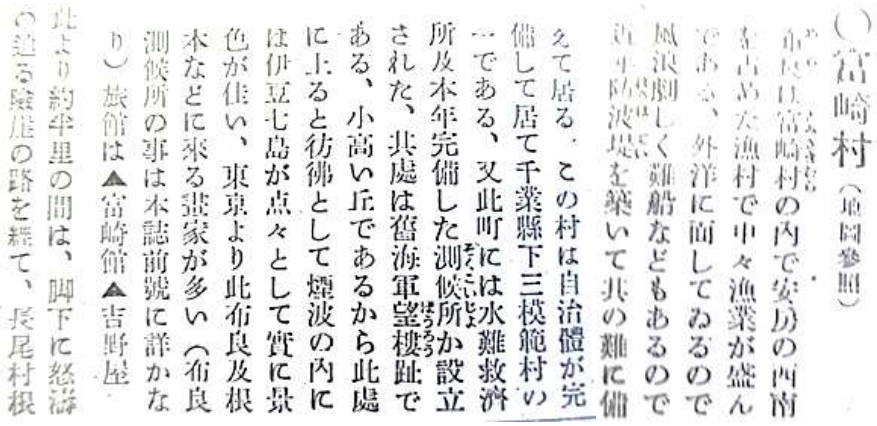
房州は三面を控ゆる國柄で、漁業が尤も發達し、日本全國に渉り屈指の水産地として世間に承認されて居る。近海漁業に遠洋漁業にナカナカ盛ん…その漁業の収穫高許りでも、明治四十二年度の調べで…二百四十四萬三千五百五十六圓に上り、…民業の大體は漁農兼業の状態…數字を以て統計的に分類すると、漁五農三で其他が二の割合である。…之を要するに歳入歳出等の総べてに於て、千葉縣下十二郡内で何れの方面から見ても…第一位を占めて居る…納税成績に徴し、一般を通じて中産程度と断定しても差支へはなからう。物産は魚貝、海藻、米穀、蔬菜、果實、菽類、生糸、繭、牛馬、鶏卵、木材、石材、酒、醤油、薪炭、茶、白土、織物、畳表、莫蓙等が重なる者である。

人情と風俗

人情は概して正直で従順であるだけ、夫れだけ保守の觀念に富み進取の氣象に乏しいやうで、従つて個人主義が行はれて自から町村割據の模様が取れないやうだ、風俗は頗ぶる質朴で奢侈の惡弊がなく勤勞の美習がある、警察署や、裁判所の事故の少きに徴しても、其等の大體を觀測する事ができる。畢竟するに氣候の影響と山光水色の自然感化もあらうが此の邊が大に研究一番の價値ある所…」

●当時、外部から安房の人びとがどう見られていたかがわかる。著者は旅行ジャーナリストで、安房に縁があって 20 年ほど通っていると述べている。今日と比較しても興味深い記述である。布良に来た青木らが、地域の人びとからどのように見られ、どう受け入れられたかを知るうえで、参考となるかもしれない。

⑧『楽土之房州 夏季特別号 房州案内』大正 12 年　楽土社



（富崎村（地図参照）

布良は富崎村の内で安房の西南部に当る漁村で中々漁業が盛んである、外洋に面してゐるので風浪劇しく難船などもあるので近年防波堤を築いて其の難に備えて居る。この村は自治體が完備して居て千葉縣下三模範村の一である、又此町には水難救濟所及本年完備した測候所が設立された、其處は舊海軍望樓跡である、小高い丘であるから此處に上ると彷彿として煙波の内には伊豆七島が点々として實に景色が佳い、東京より此布良及根本などに來る畫家が多い（布良測候所の事は本誌前號に詳かなり）旅館は▲富崎館▲吉野屋

此より約半里の間は、脚下に怒濤の迫る險崖の路を經て、長尾村根

※ 大正 12 年の時点では富崎村の旅館は「▲富崎館▲吉野屋」と記載される。

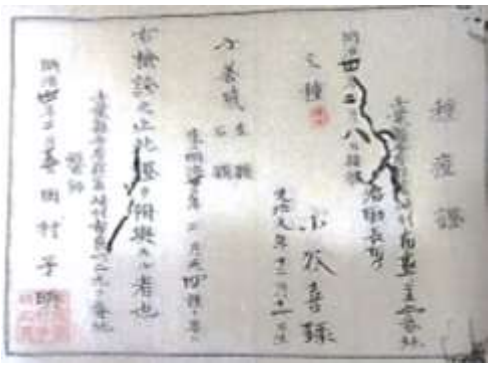
（２） 布良の医師～「福田証言」と「高島証言」の検証

①「福田証言」の「田村という医師」について

～『安房医師会誌』「会員の異動記録」

明治 29 年・36 年・40 年、43 年の４回「富崎村布良 田村子明」との記載あり。

「明治 44 年５月～大正９年２月異動」には「富崎村 田村子明大２退会」とあるので、1896（明治 29）年から 1913（大正２）年まで富崎村布良で医院を開業していた。住所は布良 1290 番



（小谷家蔵）

地で、布良崎神社の隣であり、小谷家とも近い。なお、内務省衛生局『日本医籍』（明治 22 年）忠愛社には、安房郡 21 名の中に「布良村田村子明」とある。

②「高島証言」の「郵便局長の川上」とは。

「…宿の親戚、**郵便局長の川上氏の息子に、たのまれて、英語の手ほどき**をしてやった縁などあり。青木が布良に行く時には、そこで唯一軒の旅館であった此の**柏屋と、隣の川上氏とに、情を尽して、紹介依頼の手紙を、ことづけたが。**…」

当時、1880（明治 13）年に布良郵便局に設置されると、「神田辰太郎」は取扱役になるとともに局長となり 30 余年郵便にあった。ゆえに郵便局長としての「川上」はいない。柏屋の隣は郵便局であるが、実は「川上」宅も存在した。高島が布良に来たときの「川上」であれば、漢方医「川上恭順」宅であり、医者はやめて村政に関わって、1889（明治 22）年には小谷治助とともに布良区会議員になっている。「高島証言」は、この人物と息子と思われる。

川上家は小谷家と親しく、青木らを小谷喜録に紹介したことは考えられる。現在の小谷栄の妻としが母ゆきから伝えられていることは、恭順の息子恭三を「川上のおじさん」と呼んで親しい関係であったという。現在は富崎地区で川上家はないので、家系が絶えたかもしれない。最近、布良の墓地から恭三が建立した「七代恭順」（大正４年没）の墓石を発見した。明治初期の『医術営業仮鑑札交付人名表』（明治９年）には、「布良村 川上恭順」とあるが、その後、医者である証明である鑑札を更新しなかったようだ。

特別展『村の医者どん』図録（館山市博蔵）

鑑札番號	小區郡名	村町名	人名
一	一安房	神余	和韻貫齋
二	仝	滝口	岡島春齋
三	仝	仝	高橋玄岱
四	仝	仝寄留	笹山可敬
五	二安房	太神宮	高梨文援
六	仝	仝	吉田文仲
七	仝	布良	川上恭順
八	二安房	茂名	小谷一作
九	三安房	伊戸	岡南祥

第壹大區安房國

醫術營業假鑑札交付